

まぼろしのロシア皇太子青森来訪

「大津事件」と青森

1891年（明治24年）、日本訪問中のロシア皇太子が警備の巡査に襲われた「大津事件」は、政府の犯人死刑要求に対し、大審院長・児島惟謙が司法権の独立を守った出来事として知られています。もし事件がなければ皇太子（ニコライ【写真1】）が青森を訪ねる予定であったことを知る人は多くありません。『新青森市史』通史編第3巻で触れられなかったロシアと青森のエピソードをご紹介します。



【写真1】
皇太子の時代のニコライ（1889年）

【問合せ】
市史編さん室 ☎ 017-732-5271

皇太子のアジア漫遊

1891年5月、ロシア政府はロシア極東のウラジオストクでシベリア鉄道起工式を行うことを計画しました。シベリア鉄道はモスクワ―ウラジオストク間約9千キロメートルを結ぶ鉄道で、ロシアの東方開発・極東戦略を担う重要幹線となるものです。当時のロシア皇帝はアレクサンドル3世、皇太子はニコライでした。22歳のニコライは皇帝の名代として起工式に参列することになり、皇帝の勧めもあって弟のゲオルギー親王とともに海路アジア諸地域を歴訪、日本を経てウラジオストクに向かうことになりました。

1890年11月4日（露暦10月23日）、ニコライは首都サンクト・ペテルブルクを出発、陸路オーストリアを訪問、トリエステで御召艦「パーミヤティ・アゾヴァ号（通称アゾフ号【写真2】）に乗船しました。アゾフ号は2隻の随従艦を従えてギリシアを訪問、



ニコライの行程とシベリア鉄道

そこで従兄弟のギリシア王国ゲオルギオス親王が加わりエジプト・スエズ運河からインド洋に入りボンベイ・セイロン島などを訪問、中国の香港・広東・上海を経て日本に向かいました（地名は当時のもの）。途中ゲオルギーは病気のためボンベイから帰国しました。

ニコライとゲオルギオスを乗せたアゾフ号は1891年4月27日に長崎に入港しました。日本政府はこの未来のロシア皇帝を国賓待遇で迎えることとし、欧州体験とロシア皇室を訪ねたことのある有栖川宮威仁親王を接待役に任じて念入りに準備していました。

長崎寄港の際は接待役として随伴員が大礼服正装で端艇に乗り出迎えたほ

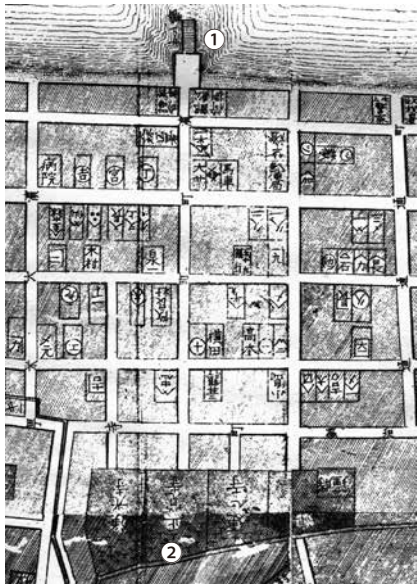


【写真2】巡洋艦アゾフ（パーミヤティ・アゾヴァ）号

か、長崎県知事・海軍佐世保鎮守府司令官・艦長・裁判所長・検事長・税関長等が大礼服正装で出迎え、盛大な歓迎行事が行われました。長崎市も独自の歓迎の緑門（植物を飾り付けた仮設の門）を設け、夜は赤い提灯を並べて点灯し、花火を打ち上げるなどの盛大な歓迎を行いました。ニコライはゲオルギオスとともに長崎を堪能したようです。

青森の歓迎準備と期待

ニコライの観遊予定地としては長崎・鹿児島・兵庫・大阪・京都・神奈川・東京・栃木・宮城・青森の各府県があげられました。当初東京からは新



【写真3】浜町棧橋付近
当時の棧橋①は、正覚寺②の北の方角にあった。

潟を経てウラジオストクに向かう予定で、皇太子の希望で青森に変更されたといわれています。ロシアは遠浅で大形船の接岸ができなかった新潟港よりも、ウラジオストクに近い青森港【写真3】に関心を抱いていたとも考えられます。東京―青森間の行程の細部は未定で、日光や松島を観光して青森入りする計画を検討していたのでしよう。日本鉄道（後の東北本線）はまだ盛岡までしか開通していませんでした。

ニコライ訪問が伝えられると、青森では官民ともに盛大な歓迎の準備に入りました。新聞は日本鉄道の青森延伸、それに続く両羽鉄道（奥羽本線）建設計画、シベリア鉄道の起点ウラジオストクとの航路開設など、ニコライの来青を青森県経済の発展と結びつけて論じています。政府はニコライの青森出港時には威仁親王および接伴員は大礼服正装で端艇で御召艦まで見送ること

地方御遊覧の節は青森県知事・裁判所長・検事長・歩兵第五連隊の諸兵が迎送することなどを関係者に指示していましたから、長崎同様の歓送迎が見られるはずでした。青森県は県をあげて煙火による歓迎、県産品の贈呈などの計画を立てていました。

5月になると青森町では町独自の歓迎準備を進め、日本・ロシア・ギリシアの国旗数百本と打ち上げ煙火数十発を発注、礼砲代わりに煙火を打ち上げようと意気込んでいました。その計画が進行中にニコライ遭難の悲報が青森に伝わってきたのです。

大津事件

長崎遊覧を終えたニコライ一行は鹿児島で歓待を受け、5月9日には瀬戸内海を航海して神戸に上陸、列車で京都に向かいました。5月10日に京都を巡り、11日には大津に入り、琵琶湖や唐崎神社を見学しました。京都に戻ろうと三井寺を出発した直後、警備の巡査が人力車に乗っていたニコライにサーベルで斬りかかりました。ゲオルギオスが巡査を追って竹の杖で打

ち倒し、2人の人力車夫が取り押さえました。ニコライは右耳上部を斬られ、頭蓋骨に裂傷がありました。幸いにも軽傷でした。京都で待医の手当てを受けたニコライは神戸に碇泊していたアゾフ号に戻りました。

明治天皇は急遽東京から駆けつけ、神戸のニコライを見舞いました。ロシアに対する恐怖心とニコライの快癒を願う気持ちから、政府・個人を問わず多くの見舞い状や見舞い品がニコライのもとに届けられました。

5月18日、アゾフ号上で23歳の誕生日を迎えたニコライは、父帝アレクサンドル3世の指示に従って東京訪問を中止し、翌19日をもって帰国の途に就くことになりました。青森の人々の期待は大きな失望に変わりました。

ウラジオストクに着いたニコライは5月31日に挙行されたシベリア鉄道の起工式に参列、その後3か月ほど国内を周遊して首都に戻りました。

ニコライ2世の即位

・日露戦争と青森

ニコライ皇太子は1896年11月、病没した父帝アレクサンドル3世の後を継いで皇帝に即位し、ニコライ2世を名乗ります。

シベリア鉄道はバイカル湖の間を除いて1902年に開通、日露戦争中



【写真4】青浦商会浦塩支店
日露戦争後、りんご輸出などに貢献した。木村学氏提供

の1904年9月にモスクワ―ウラジオストク間が全通しました。しかし、青森とウラジオストクとの交流は途絶えてしまいます。日露戦争では、青森県からは歩兵第五連隊（青森）を含む第八師団が「満州」に出動、黒溝台（くろこうだい）でロシア軍を押し返し、日本軍の勝利を招き、「国宝師団」と呼ばれます。他方戦局を有利に導くために日本は樺太（サハリン）に出兵して全樺太を占領します。青森はその兵站基地となり、多数のロシア人捕虜が青森港に上陸して、各地の収容所に送られていきました。

日露戦争後、再び青森とウラジオストクの交流が始まります【写真4】。ウラジオストクはシベリア横断の玄関口として発展します。青森港は貿易港に指定され航路も充実し、ウラジオストクとの関係も深まってきました。

（『新青森市史』通史編執筆協力員 荒井悦郎〈埼玉県立越谷西高等学校教諭〉）